

私は一人っ子として静岡市に生まれました。私なりに頑張って努力してみるものの、いつも最後の詰めが甘く、希望に及ばない生き方でした。

私が大学を目指す頃、教科書裁判があり、専門家でもない者が古代史の大家である家永三郎先生を吊し上げているのを腹立たしく思っていました。しかしながら、私もろくに訳も分からずに応援しているだけの者であり、応援するなら古代史を学ぶべきだと思います。家永先生に手紙を出すと間もなく、お返事をいただきました。「教科書裁判の結果に一喜一憂することなく、歴史的事実として日本の歴史に残したい」とありました。そして、「あなたが史学部に入学されることをお祈りしています」と書かれていました。家永三郎先生のところへ聴講生としていくことを夢に見、東京の大学を志しました。頭の悪い私は、人一倍勉強しました。明治大学の歴史地理学科古代史専攻に合格しました。しかし、ここで、現実を嫌という程知らされたのです。家永先生の著書『上宮聖徳法王帝説の研究』を買い求め、ペラペラとめくった時、私は実物大の自分を発見したのです。難しくて全く分からない。聴講生なんて恥ずかしくて行けたものではありません。努力しても努力しても届かない世界があることを、つくづく知らされました。今までは努力さえすれば何とかかなと思っていたものの、この現実は一筋縄ではなかった。

父が「大学を出たから何も出来ませんでしたという女になるな。授業料出してあげるから料理学校へ通うように。」と言ってきたので、江上トミ先生の学校に通いました。トミ先生の「どこの国の料理もその国に行って、実際に食べないと教えないことにしている。」と言われました。手抜きすることなく、最高のものをつくらうとする努力を教えてくださいました。私は楽しくて楽しくてたまりませんでした。習ってきたものに必死になって近付けようとしたのですが、とてもとても届きはしませんでした。

私って、本当は歴史よりこちらの方が合っているのかと薄々気づいてきました。

明大の近くを歩いていたら「お茶の水池坊学院」を見つけました。ここでお花を習いたいと思いましたが、学生の身では高嶺の花でした。そこを通る度に通いたいという思いは募ってきましたが、諦めていました。

明治を卒業して静岡に戻りました。静岡県立図書館でアルバイトをしていました。またまた父が、お茶とお花が出来ないといけないというので、茶道は裏千家、お花は池坊、更にまた料理学校にも通い始めました。編み物もやり始めました。編み物も大好きになり、そこらへんの先生よりよっぽど上手に編めました。お料理も大好きで、おいしいものをつくって食べさせるのが喜びでした。料理学校の教員資格も取りました。

お花は偶然にも、池坊に通うことになりました。先生のお宅に生けてあるお立花、お生花には、あまりの美しさに引き込まれてしまいました。

父が歴史なんかやるより、家政科にでも行って料理学校の教師になった方が良かったんじゃないかと言いましたが、私は明治で歴史を学ぼうとした努力だけは後悔していません。そこが第二の出発点であると思えるからです。どんなに頑張っても届かない世界があることを知ったのは明治大学でしたから。

明治大学で努力して教員資格、学芸員資格を取っても、社会科教師にはなれない、なぜ

なら私は馬鹿だから。

今でもお料理が好きで、京都の老舗にまで習いに行くのに料理の先生になれない。なぜなら私は不器用だから。

編み物の先生にもなれない、なぜならどんなに上手く編めても製図が出来ないから。

茶道の先生にもなれない、なぜならお道具揃える経済力がない上に、数多くのお手前を覚えられないから。特に紐の結び方は難しい。

そして、一番長く続いているのが華道。形式上の 10 年のブランクがあるものの、池坊に入門して 35 年。奈良県支部の先生方にも、早く引立教授をして下さいと再三言われているのになれない。正直言って経済力がない。次に実力がないから気後れする。

娘にさえも言われた。「お母さんはそうやって一生終えるんだよ。」非常に身にしみる言葉でした。

実物大の私ってどうなんだろう。

実物大の私って何なんだろう。

何をやっても届かない。

お花だって、池坊の最高教育機関と言われている中央研修学院に入り、2 年も経ったら何か掴めると思ったのに、山に登ったら月は遠いと気付いた心境。

やればやる程身の丈を知り、身の丈に合った人生を送ろうとすると、私は何の為に生きているのだろう。私の存在って価値があるのかと悩む。

そこで出会ったのが聖書の言葉。

あなたは高価で尊い。存在しているだけで高価で尊い。何も出来なくても…。それどころか何もせず、努力さえしなくても、存在しているだけで高価で尊い。結果を出さなくては何の価値もないと言われた時、人は生きられなくなる。

そして、結果を出さなくては駄目だと言っているのは、他人ではなく自分自身なのだ。自分自身が一番自分自身に厳しく、自分を鞭打ち責めている。そこまでは分かっているのに…。

劣等感の裏には「私はこんな小さな者ではない」という強い優越感とプライドがあるという。私はここで行き詰まっている。それを認めたくない自分がある。私は心美しくありたい。私の中に強い優越感や醜いプライドな人があってたまるかという思いが強い。

本当の意味での自分の身の丈。

自分を大切にしていあげつつ、身の丈を歩みたいと思っている。